

2024年3月28日

動物とテレパシー 佐野陽子・渡辺賢人 共同執筆

目次

はじめに

1. エジソンの最後の挑戦：霊界通信機
2. テレパシーの支持者フレデリック・マイヤース教授、そしてみなかたくまぐす南方熊楠
3. 佐藤愛子の冥界 筆舌に尽くし難い佐藤愛子の業
4. 飼い主の帰りがわかる犬 ルパート・シェルドレイクと野村潤一郎
5. テレパシーの最前線

むすび

文献リスト

はじめに

ペットは、人の言葉がわかると言います。言葉ばかりでなく、人の気持ちもわかることが多いようです。また、飼い主が帰宅する前に、そわそわと出迎える準備をする犬もいます。そのような行為をテレパシーと呼ぶことがあります。テレパシーは、予知能力と呼ばれることがありますが、現代科学では必ずしも解明されていませんので、ときにうさん臭く見られます。

テレパシーとは、心の中の思考や感情を言葉や動作なしに他者に伝えたり、他者から受け取ったりする能力のことで、五感を経ずして情報を伝達し合うことに特徴があります。

テレパシーは超常現象やサイキック能力として扱われることが多いですが、科学的な根拠や証明はありません。テレパシーの定義には幅広い視点があります。例えば、テレパシーは人間だけでなく動物や植物にも存在するという説や、テレパシーは電磁波や量子力学的な現象によって説明できるという説などがあります。しかし、これらの説はいずれも実験的に検証されていないか、再現性が低いか、あるいは反証されています。したがって、テレパシーは現在の科学では定義できない不確かな概念であると言えます。

テレパシーとは

テレパシーとは、心の中の思考や感情を言葉や動作なしに他者に伝えたり、他者から受け取ったりする能力のことです。テレパシーの歴史については、古代から現代まで様々な文化や宗教で言及されてきました。例えば、古代エジプトではテレパシーは神々の力として信じられていました。中世ヨーロッパではテレパシーは魔術や魔女と関連付けられていました。近代ではテレパシーは心霊現象や超心理学の研究対象となりました。現代ではテレパシーは科学的なアプローチや技術的な支援を用いて実現しようとする試みがあります。しかし、テレパシーはいまだに科学的に証明されたことはありませんし、存在するかどうかも確かではありません。

テレパシーの軍事利用

そんなテレパシーを含む超能力ですが、冷戦時代、アメリカ陸軍は軍事利用を真面目に考えていたといいます。スターゲイト・プロジェクトと称され、透視を中心に研究が進められていたようです。きっかけはソ連が超能力者を集めているという噂が流れたからで、両者、本気で技術競争をしていたそうです。結局、ソ連崩壊に合わせてプロジェクトは終了したと言われていますが、その後も、米国防総省の国防高等研究計画庁は 2009 年にテレパシー研究のため、400 万ドルの

予算を計上していると WEB メディア WIRED NEWS は報じています。また、ニュースウィークによると、ロシア国防省は 2019 年の公式機関紙で兵士を支援する超能力を戦術に活用したり、イルカを使ったテレパシー実験を行ったりしていると伝えているそうです。

動物とテレパシー

動物たちの間ではテレパシーと思われる現象が多々観測されています。たとえば、渡り鳥は大陸から大陸へ、言葉を交わすことなく群れのまま集団飛行することができます。イワシなど、小魚が捕食されることを避けるために集団で遊泳するときも行動指針をどのように共有しているのでしょうか。大量発生するイナゴもなぜ一斉に行動ができるのか、未だ、仕組みは解明されていません。

もしかしたら、言葉を発明した人間と違って、動物たちは独自の方法でコミュニケーション能力を高めていったのかもしれませんが。そして、人間もまた動物であるとするならば、同様の力を発揮できるポテンシャルを備えていたとしても不思議ではありません。

特に、家族として、歴史的に身近なパートナーであり続けたイヌと人間の間には

注目すべき絆があると考えられています。イヌと一緒に暮らす人たちの多くは、言葉を介さず、愛犬と親密なコミュニケーションを交わしています。加えて、テレパシーに似た体験が語られることもしばしばあります。

本書は第一章～第三章でエジソンやフレデリック・マイヤース教授、^{みなかたくまぐす}南方熊楠、佐藤愛子ら、テレパシーにまつわる研究や体験をした人たちの記録を紹介します。第四章～第五章でルパート・シェルドレイクと野村潤一郎が明らかにした愛犬と人間の絆について紹介します。これによって、動物とテレパシーについて、その最前線を明らかにすることを目指しています。

参考資料

- ・ WIRED NEWS : Pentagon Preps Soldier Telepathy Push

<https://www.wired.com/2009/05/pentagon-preps-soldier-telepathy-push/>

- ・ ニューズウィーク日本版：ロシア軍は超能力を使っている？

<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/04/post-11934.php>

1. エジソンの最後の挑戦：霊界通信機

エジソンが最後に発明しようとしていたもの「霊界通信機」

トーマス・エジソン（1842-1931）は、電話機・無線機・白熱電球・映画などを発明した世紀の発明王として歴史にその名を遺しました。彼が取得した特許は、実に 1,093 件にのぼっています。エジソンに惚れ込んだ P.モルガン（G.E.）は、晩年、エジソン家の隣に別荘を建て、経済的援助を惜しまなかったそうです。努力の人でもあったエジソンは、1,200 以上の特許を取っています。

しかしエジソンが、最後に手掛けた発明については、成功していなかったためか、あまり多くが語られていません。それは、死者と交信するための「スピリット・フォン」（霊界通信機）だったのです。

エジソンは、「天才とは、99%の汗と、1%の靈感からなる」と言ったそうです。

また、バート・リースは、エジソンは霊界の証明に関心があったと言います。それゆえに、エジソンは最後に「霊界通信機」を発明しようとしていたのです。

エジソンは、死ぬ 15 年も前から、このスピリット・フォンによって、死者の声

を録音することに意欲を燃やしていました。それは、彼が当時流行っていたオカルトに興味を持っていたからです。ヘレナ・P・ブラヴァッキー夫人(1831-1891年)らは、イギリス・ロンドンで神智学協会を創立しましたが、エジソンはその創立者の1人でした。当時、ロンドンから始まったオカルト研究は、アメリカなど国際的にも波及し、多くの同志を集めました。(日本人の^{みなかたくまくす}南方熊楠もその1人です。)

しかしながら、その後の自然科学の発達は、死後の世界を否定する方向で、いつの間にか、「死」というのは人間にとって「無」に帰すというような動線が引かれました。さらにまた、死後の世界を論じることは科学を否定する、無知と同義というのが、半ば常識となったのが現代かもしれません。

他方、ニコラ・テスラは

エジソンと並び称される発明家にニコラ・テスラ(1856-1943)がいます。テスラはクロアチア出身の電気工学者で、300件の特許を取り、ウエスティング・ハウス社を背景に、変圧機、無線操縦、蛍光灯などを発明し、世界的な注目を集めました。言い残した言葉に、「1人の人間ははかなく、民族や国家は誕生し消滅する。だが人類は生き残る」があります。

かつてエジソンは直流の電流方式を推していたのですが、テスラは交流の電流方式を推し進め、激しい競争の結果、現代は交流方式になりました。また、電気自動車のテスラ方式は、再生可能エネルギーとして注目され、今日の「テスラモーターズ」は時代の寵児として脚光を浴びています。

前述の通り、エジソンは、超自然的なものに魅せられた一面があり、来世を信じ、死者と交信する電信装置を研究していました。彼は、「人間の魂もエネルギーであり、宇宙のエネルギーの一部である」と考えました。エネルギーは不変なので、魂というエネルギーは死後も存在し、この蓄積が記憶になるというのです。

他方、テスラは、「私の脳は受信機に過ぎない。宇宙には中核となるものがあり、私たちはそこから知識や力、インスピレーションを得て存在することがわかる。」と言っています。エジソンほどではありませんが、共通する思考の筋道があるようです。イーロン・マスクは、後にテスラを記念して、自社をテスラと命名しました。

2. テレパシーの支持者フレデリック・マイヤース教授、

そしてみなかたくまぐす南方熊楠

幽霊というと、人により、時代により、背景により、いろいろな反応があるでしょう。日本でも、幽霊にまつわる話はタネが尽きませんが、イギリス人も幽霊については格別親しみを持っていたようです。「魔法使い」とか、「ハリーポッター」とか、「ネッシー」など、幽霊がらみの話題は尽きません。イギリスの古い家の壁一面に、絵画が飾られていることがよくありますが、これは幽霊が跳び出さないようにしたためだとか。

心霊現象研究集会

そのことが関係あるかどうかわかりませんが、実は心霊現象を研究する学会が、1882年（明治15年）にケンブリッジ大学で設立されているのです。初代会長は、ヘンリ・シジュウィック（Henry Sidgwick, 1838-1900）という、ケンブリッジ大学の倫理学教授でありました。そしてその後現在まで、140年間も活動を続けているのです。

学会名は、The Society for Psychical Research で、略称は SPR です。現在は、

ロンドンの静かな街の一角に事務所があり、学会活動だけは続けているようです。

(参考文献 ピーター・バーグ著 井山弘幸訳 『知識の社会史 2』 新耀社 2015年)

アメリカでも同様の活動がありましたから、当時は同じような学会や研究団体が各処にあったはずですが。日本では、東洋大学の祖である井上円了の妖怪学(1896年)が有名です。しかしながら心霊研究は、その後、心霊の実証に成功せず現在にいたっています。

テレパシーは誰が、どこから、いつ日本へ？

原語のまま、「テレパシー」という言葉が使われていますが、日本ではいつ、だれが使い始めたのでしょうか。

みなかたくまぐす
南方熊楠(みなみかた くまぐす、1867-1941年)がその人でありました。

みなかたくまぐす
南方熊楠の肩書はいろいろあります。海藻学者として粘菌の研究者でありましたので「生物学者」、広く植物・動物の研究をしていましたので「博物学者」、心

霊現象に興味をもっていたので「心霊現象研究者」等々。また、柳田国男の盟友で、民族学者でもありました。

みなかたくまぐす南方熊楠は、和歌山県田辺市の出身。旧制中学卒業後、大学進学の夢をもちながら独自路線を歩み、アメリカとイギリスに留学しながら実戦に強くなりました。天才・奇才というにふさわしい才能の持ち主。生涯、在野にいましたが、興味をもたれた昭和天皇に進講し、その場所となった瀬戸内海の神島は、彼の自然保護運動の先鋒となったところです。みなかたくまぐす南方熊楠記念館は和歌山県白浜町に、みなかたくまぐす南方熊楠顕彰館は和歌山県田辺市にあります。

ところで、テレパシーという言葉は造語で、それを考案したのは、フレデリック・マイヤース (Frederic W. H. Myers, 1843-1901) です。当時の LONDON は学問のメッカで、論文の発表の重要な場でもありました。大英博物館は、みなかたくまぐす南方熊楠の研究の場で、彼は生涯で、50本の論文が『ネイチャー』に掲載されました。もちろん最高記録です。

そして当時、ケンブリッジ大学を中心として、心霊現象研究学会が組織されました。その発起人の1人がマイヤースで、その学会誌第1号(1882年12月)に

テレパシーという用語が記載されました。その定義は、「認識感覚器官の経路とは無関係に行われるある者からもう一人の者へのあらゆる感情の交信」となっています。その後、機関誌「ヒューマン・パーソナリティ」の発刊（1903年2月）後、この語テレパシーが普及したのです。例えば、双子の兄弟の例などがよく語られました。

（参考文献 唐澤太輔 「南方熊楠と“テレパシー”という言葉に関する考察」『エコ・フィロソフィ研究』2015年3月。唐澤太輔「世界が驚いた論文を生んだ“至純な好奇心、和歌山が生んだ、世界レベルの“知の巨人”南方熊楠」『歴史街道』2017年7月。）

日本におけるテレパシーの語源

みなかたくまぐす
南方熊楠はとくに粘菌の研究者として知られています。キノコ、藻類、コケ、しだ、さらに高等植物、昆虫、小動物の採集も行っていました。

渡米後、イギリスにわたり、心霊研究会(The Society for Psychical Research)に参加しました(1882年2月20日)。この学会の初代所長は、ヘンリ・シジウィック(1838-1900年)ケンブリッジ大学教授(倫理学)でした。そして、この学会のキーワードが「テレパシー」だったのです。この原語をそのまま、日本

で使いました。

(注 唐澤太輔 “^{みなかたくまぐす}南方熊楠と「テレパシー」という言葉に関する考察” 『エコ・フィロソフィ研究』(東洋大学) 2015年9月 61 - 74。)

^{みなかたくまぐす}南方熊楠の生涯をかいつまむと。

^{くまぐす}熊楠は、当時、裕福な商家の9人きょうだいの次男として生まれ、父親からは学問をするよう大いに期待されました。小学校では勉強はもちろん、喧嘩が特に強かったそうです。その後、当然のごとく東京大学への路線に乗り、当時、夏目漱石・正岡子規らと予備校の同窓でしたが、既成のプログラムに反抗して、アメリカに留学することになりました。それも、正規の学生になることに飽き足らず、好きなことだけを追求するというスタイルでした。

^{くまぐす}熊楠は、父親に不孝をしていることを知りながら、自分の追求するものを追わざるを得なかったようで、父親の死亡時まで学資を送金してもらいました。留学中に父親が他界、跡目を継いだ弟から引き続いて送金をしてもらっていました。ところがそれも段々難しくなり、弟から送金の断り状が届いたので、仕方なく帰国することになりました。それが、国を出てから米英の滞在17年目のことです。

帰国後、和歌浦で隠花植物の調査をし、さらに那智山にこもり菌類の採集を行っていました。1906年に転機が訪れました。結婚をして、翌年、長男を、そして5年後に長女を授かりました。長男は病弱で、その後夭折しますが、長女文枝とその夫は、よく父親を援けました。

知の巨人・みなかたくまぐす南方熊楠がいま、脚光を浴びる理由

みなかたくまぐす南方熊楠は、生誕150年、没後80年にもなろうとすると、各処で見直されています。みなかたくまぐす南方熊楠顕彰館(自宅や墓のある田辺市)やみなかたくまぐす南方熊楠記念館(白浜町)がその歩みを示しています。和歌山県田辺市、そして和歌山県としても郷土の偉人であり、このようにとくに現代になって注目されるのには、どのような意義があるのでしょうか。

第一に、みなかたくまぐす南方熊楠の生涯にわたって、英国の科学誌『ネイチャー』などに通算400篇にも及ぶ論文を発表したことです。今の日本の研究水準は、他者に引用される論文の数で評価すると、国際的に劣っているのが問題になっています。どこにも所属しないでこれだけの業績を、この時代に挙げたというのは驚くばかりです。

第二には、みなかたくまぐす南方熊楠は、英語だけでなく、広く語学に長けていて、18か国語を

あやつることができるマルチリンガルでした。これもまた、国際化が勧められるべき現代において、学ぶべきところでしょう。当然、研究対象も全世界でした。

第三に、これだけの偉業を成し遂げたにもかかわらず、生涯、無職であったことは特筆すべき。これは、親・兄弟の協力があればこそのことですが、さすがに後になるほど、弟（2代目）との不協和音があったようです。家業「世界一統」は現在、父親の代からの6代目が継ぎ、和歌山市で酒造業を営んでいます。

第四に、他者の協力者の一人として、水木しげるのマンガによる貢献も無視できません。水木は、「猫楠」と呼び、学問のあるガキ大将と評しています。

（水木しげる 『猫楠 みなかたくまぐす 南方熊楠の生涯』 角川文庫 1996年）

第五に、みなかたくまぐす南方熊楠は、神社や自然資源の保存に力を入れたこと。

みなかたくまぐす南方熊楠の生涯のハイライト 昭和天皇へのご進講

生物に関心の深い昭和天皇からの要請もあり、くまぐす熊楠は1929年6月1日に三重県鳥羽市神島(かしま)を前に、田辺湾の船上で、粘菌や海中生物について説明をしました。その結果、神島は、後に天然記念物に指定されました。

さらに昭和天皇は、1962年5月の紀南行幸時に、「雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みしみなかたくまぐす南方熊楠を思ふ」と詠んだほどでした。

みなかたくまぐす南方熊楠と水木しげる

「妖怪は目には見えないけれど存在する」とは、妖怪研究家・水木しげるが公言しているところです。水木しげるの妖怪ワールドはあまりにも有名ですが、「妖怪とは、ある種の霊に違いない」とも言っています。

水木しげるの生涯

水木しげるは、1922年に大阪府で生まれ、2015年に93歳で他界しました。22歳のとき太平洋戦争の激戦地ラバウルで、左腕を失うという戦傷を負いました。1957年35歳のとき、経済的行き詰まりから漫画家への転身を図り、上京。「水木しげる」のペンネームで活躍を始めました。39歳のとき29歳の飯塚布枝と結婚。以後、執筆を重ね、2015年93歳で死去するまで、1831もの作品を世に出しました。赤貧の結婚生活初期から、爆発的人気の「ゲゲゲの鬼太郎ブーム」、さらに忙しさのあまり活動水準を引き下げるなど、千変万化の生涯を過ごしました。

みなかたくまぐす 南方熊楠と水木しげる

1991年には、紫綬褒章を受章しました。そのときの受賞式には、日ごろの言動とは裏腹に、みなかたくまぐす南方熊楠にあやかって燕尾服にシルクハットといういでたちで出席しました。みなかたくまぐす南方熊楠については、『猫楠 みなかたくまぐす南方熊楠の生涯』（1996年）という単行書を発表するほどのファンでありました。このみなかたくまぐす南方熊楠が往時、昭和天皇に御進講申し上げたときの服装が、シルクハットに燕尾服だったからです。

神も仏も妖怪も・・・

「神様も妖怪も目に見えません。祈ったって、お返しなんかこないです。」水木しげるは、神も仏も妖怪も、みんな霊の一種と言っています。水木のふるさとは、古代出雲（島根県）にあり、古代日本の「霊のメッカ」だった出雲が滅びたことから、精霊信仰が失われたと。それゆえ、神や仏や妖怪の精霊信仰の奥には、古代日本の「霊のメッカ」だった古代出雲神話までさかのぼらなければならない、というのが、水木への晩年の啓示だったそうです。

21世紀の幸福とは

京都マンガミュージアム館長・あらまたひろし荒俣宏の言葉を借りると、幸福になるのはかん

たん、「なまけものになりなさい」。売れっ子になって、恐ろしいほど多忙になり文明に毒された水木しげるですが、「精霊と聖地」探しに舵を切ると、まわりに妖怪好きの奇人変人が集まり、底抜けに明るい作品が出てきました。登場人物も「妖怪バカ」が中心となり、自由に生きるなまけものが主役になりました。作品「幽霊」では、お母さんの葬式で、仏様の前で好き勝手な話をする子供たちや親せきに腹を立て、お母さんは幽霊となり、一同を殴り倒す。皆はお母さんの幽霊を鎮めようと「幽霊音頭」を急ごしらえして踊り出す。もはや、あの世とこの世の境目が無くなる始末です。

現世のような混乱の世の中になったのは、人間が幸福を求めて働きすぎたため。水木しげるの、晩年のどの話も「怠け者になりなさい」と言っています。これは、21世紀の衰退する日本へ向けた「幸福指南」だと荒俣は強調しています。

3. 佐藤愛子の冥界 筆舌に尽くし難い佐藤愛子の業

筆舌に尽くしがたい佐藤愛子の業^{ごう}

ベストセラー・『九十歳。何がめでたい』や、『九十八歳 戦いやまず日は暮れず』で高齢化社会を風靡している佐藤愛子。作家として大活躍。2023年には100歳を迎えようとする文豪ですが、実は、51歳から79歳の28年間、大変な体験をしたのです。霊にかんする事態で、冷静な作家らしく、1冊の本にまとめてあります。『私の遺言』（新潮社 2002年）と題して、ほかの作品とは別枠です。

北海道の山荘

20歳までは順調なお嬢様生活だった佐藤愛子は、二度の結婚の苦勞と破産の危機を乗り越えて、作家としての収入が増えて来ました。そのとき、勧める人があって、北海道の日高地方・浦河町に、夏だけ利用する山荘を建てることにしました。そこは、海を見晴らせる山腹にあり、風光明媚・自然に溢れた理想的なロケーションであったそうです。ただ、麓からは100メートルほど登らねばならず、電柱を10本も建てなければならなかったとか。この山荘が佐藤愛子の30年にも及ぶ心霊体験の舞台になったとは！

心霊現象

イギリスは、昔から心霊学が盛んで、心霊学会などが今も活動をしています。心霊現象の例として、「ラップ現象」とか、「ポルターガイスト現象」とかが登場します。ラップ現象というのは、誰もいない部屋で物音がすることなどを言い、ポルターガイスト現象というのは、手を触れないのに音・光・火・移動が起こることなどを言います。両者とも、代表的な心霊現象です。

山荘が出来上がった年の夏、高校生の愛子の娘が友人たちと初めて泊まりに行ったとき、夜中に屋根の上で足音がしたこと、その上、翌日見たら段ボールの箱が8つのうち2つが無くなっていた、というのです。愛子はその報告を聞き、「あ、そう」と聞き流していたのですが、実はこれが30年にも及ぶ「霊との付き合い」の始まりだったのです。

霊能者を通して

愛子が真剣に心霊現象に悩みだしたのは、実はそれから10年以上経ってからでした。そのころから心霊現象が頻繁になり、さすがの愛子も悩ませるに至りました。愛子はそれを、霊能者としても知られている美輪明宏に相談しました。美輪はまず、アイヌの人の霊を鎮める必要があると説きました。愛子はそれまで、「人

は死ぬと無になる」という現代人でしたが、霊を鎮めるために霊能者らと付き合い
うことになりました。

アイヌの地縛霊と祖先の因縁霊

1975年に山荘を建てたのですが、10年以上経ってから心霊体験がひどくなった
こともあり、現地で霊視をしてもらいました。超古神道、日神信仰、などの霊能
家らの霊視の結果、佐藤愛子には、戦国時代に遡る祖先からの因縁霊と、山荘を
建てた場所ですが、アイヌ人が日本人に滅ぼされた古戦場であったため地縛霊
が重なって張りついていることがわかりました。

霊能者らの助言により、朝夕、アイヌの霊や祖先の霊が鎮まるようお題目をあげ
て10年が経ちました。愛子62歳になったとき、10周年記念に町長らをよんで
大酒盛りを行いました。

ところが1988年に再び山荘に異常が発生しました。携帯電話が無くなったと思
ったらソファの中から出てきたり、車のキーがまたソファの中から出てきたり
したのです。愛子は、日本心霊科学協会の霊媒師に相談したところ、滅ぼされた
アイヌや佐藤家の祖先の因縁が浄化されぬまま増幅していることがわかりまし

た。アイヌの怨念や先祖の因縁が浄化されぬまま増幅しているとのこと。愛子にその浄化の役目が負わされていて、アイヌも祖先の怨念も差し迫っているとのこと。

除霊の試み

愛子は、アイヌ霊団と先祖の除霊をおこなうため、1990年11月11日に先祖まつりを行いました。ところが今度は、東京の自宅で、ラップ音がしたり、電気やFAXの異常が発生したりしました。1990年12月、心霊科学協会本部を訪れ、招霊をしたところ、佐藤家に住居を壊された野狐が、社を作れと言っているとのこと。1991年5月3日、改めて総勢5名で招霊実験を行いました。

密度の高いやりとりで、青年アイヌの怨霊マイはようやく去り、愛子はアイヌ民族の気持ちがわかったと。愛子67歳で、ここに至るまで16年の歳月が費やされました。しかしこれで終わりかと思ったら、その後、飼い犬やインコや孫の赤ん坊や台所のペットボトルに異変が生じました。1994年6月6日に、愛子たち3人は再び山荘へ行き、集まった霊たち（アイヌ、囚人、屯田兵）に愛子たちの気持ちを伝えました。

その結果か、1996年、1997年は北海道は静かとなり、東京宅でのみ異常現象が起きました。その結果、愛子は、人の「波動」を高めることが重要であることを体得しました。

遠藤周作との約束

友人の遠藤周作は、1996年9月に死去しました。その年の1月に、彼は愛子に「死後の世界はあるか」について約束をしました。それは、先に死んだ者はその結果を生存者に知らせること。愛子はあることを信じていましたが。ところがその後、霊媒者を通して、死後の世界のあることを知らせてきたのです。ご本人は死後、生前の善行によって魂が磨かれていたので、通常なら必要とされる膨大な修行段階が免除され、特急の速さで「天国」在住となったとのこと。

佐藤家の浄化

2000年、愛子79歳になったころ、佐藤家の浄化が行われたことが霊媒者により知らされました。それは、佐藤家の一族が、一人ずつ空を昇って行くのです。愛子の解釈では、全員があの世界に行くのではなく、一人ずつ定められた段階におさまるのだとか。遠藤周作は天国に行きましたが、夫婦でも親子でも、一人ずつ判断されるのです。いずれにしても、このとき佐藤家全員の霊が浄化されました

から、愛子の居宅ではすべてが鎮まったことになります。愛子が51歳からかわった浄化が完成し、すべてが終わったことになりました。

冥界からの電話 佐藤愛子の場合

冥界とは、現世と霊界の間にある世界で、死んでも霊界に着いていない霊は、この冥界をさま迷っているとか。古来の幽霊というのは、まさにこの冥界を舞台にしたそうです。

売れっ子の高齢作家「佐藤愛子」は、不思議な体験を本にしました。それは、自分の体験ではなく、友人の男性医師の体験です。2018年にこの本は新潮社から刊行されましたが、2021年8月に再び、新潮文庫から再版されました。

その内容というのは、この男性医師が好意を持っていた若い女性から、自動車事故で死亡したにもかかわらず、その兄を身代わりとして電話をときどきかけてくるという、摩訶不思議な体験を書いたのです。つまり、死亡した女性は、霊界に行けず、冥界にいるため、このようなことができるらしいのです。

佐藤愛子は完全な第三者で、友人の医師から頼りにされているために、冥界から

の電話があるたびに佐藤愛子に報告しているのです。彼も半信半疑でどうしてよいかわからないということですが、日本にはこのような系統の信仰があるらしく、その道の権威に尋ね、ここまでわかったそうです。

佐藤愛子はかつて、北海道に建てた別荘が、虐げられたアイヌの土地であったため、亡霊らしきものに悩まされ、いろいろ調べていたので、冥界というものも近づきやすかったようです。それにしても、結論は謎のままです。友人の医師は、女性の兄の身元を調べようとしたら、そこから電話がかかってこなくなり、一切の連絡が途絶えたそうです。それゆえ、佐藤愛子もなすすべがなく、何の結論もないまま、本書は終わっています。彼女は、このままでいい、と言っているだけです。そして、冥界というものを世に紹介してくれました。

死んだ犬から感謝のメッセージ

佐藤愛子が夏だけ使う、北海道浦河町の山荘で、ある朝、一匹の雌犬が捨てられていました。両手に載るくらいの仔犬で、佐藤愛子の博愛主義を見越して、山の中腹にあるこの家まで車で棄てに来たに違いありません。案の定、愛子は、東京まで連れて行くことを見越して、腹を立てながらも東京で飼うことにしました。名前は「ハナ」。

ハナを飼うことに決めた翌朝、けたたましい物音に愛子が目を覚ますと、何と1匹のキタキツネがハナをくわえている。愛子は「コラーツ」と言って窓から跳びおりると、キツネはハナを離して逃げて行きました。ハナは、手毬がころがるように愛子に跳びついたそうです。

しかし東京に戻ってからは、愛子の仕事が忙しいこともあって、ハナをとくに寵愛することもなく、どちらかという外犬として遠くから見ることが多く、それでもハナはご主人様の近くの屋外に待機していました。

これまでの飼い犬もそうですが、愛子は犬のごはんは、白い飯に汁掛けと決めているそうです。それも、昆布を刻んで混ぜてやるのです。この食事で、前の犬は19年も生きたとか。コロコロのドックフードより、ずっと理想的と思っていたからです。ハナもそれですくすくと育ちましたが、16歳のとき、腎不全を患って2か月余りで死んでしまいました。

愛子は、忙しさにかまけてハナをあまりかまわなかったこと、独断で昆布飯をやり続けたことに対する自責の念でいっぱい。ハナはいつもご主人様に最接近し

で見守ってくれた。屋外にいても、一番近くの窓の外に居続けてくれたのです。

ところがある日、娘が、親しくしている霊能のある女性から、ハナについて話してくれたこと。「ハナちゃんは佐藤さんに命を助けてもらったと感謝しています。」とのこと。「それにしても、このグチャグチャしたごはんは何ですか。」とたんに愛子の目からどっと涙があふれ出たということです。

4. 飼い主の帰りがわかる犬 ルパート・シェルドレイクの 実験

英国人・ルパート・シェルドレイク Rupert Shelldrake は、ケンブリッジ大学で自然科学を専攻した後、ハーバート大学で1年間、哲学と科学史を学びました。その後、ふたたびケンブリッジ大学に戻り、生化学で博士号を取得。1967年から73年まで、同大学で生化学と細胞生物学の研究者・講師をつとめながら植物発生学や細胞老化の研究を推進しました。英国王立協会会員。

処女作『生命のニューサイエンス』（1981年、日本語訳1986年）は『ニューサイエンティスト』誌をはじめアーサー・ケストラーやライアル・ワトソンなど、来るべき科学を見つめる人たちから称賛されました。1994年に刊行された『世界を変える七つの実験』はイギリスおよびインドでベストセラーとなり、同年の英国社会創造研究所のベストブック賞を受賞。アメリカPBSのテレビシリーズでも中心テーマが取り上げられ、話題を呼びました。

動物の家畜化について、「ヒトと動物の絆の歴史」、「イヌの家畜化」、「ペットの飼育」、「動物間の社会的な絆」などを調べました。

飼い主の帰りがわかるイヌ

シェルドレイクが特に注目したのは飼主がいつ家路についたかがわかるイヌに関する研究でした。イヌを飼っている人たちは経験則でそうなることを知っているけれど、そのことを特別視してきませんでした。しかし、よく考えてみると、なぜイヌが遠く離れた飼主の行動を感知することができるのか、科学的な説明はありません。

そこで、シェルドレイクは飼主がいつ家路についたかわかるイヌの実例について調査を開始しました。ペット預り所経営者や動物訓練士、ペット所有者などのインタビューを実施し、五百を越す実例レポートを集めたそうです。これらを比較検討し、複数の仮説を立てるに至りました

日課にすぎないのでは？

飼主の帰宅時間が一定であるなら、イヌの行動は日課ということになります。それぞれの状況を確認してみると、たしかに飼主の帰宅時間が一定の場合もありました。しかし、ほとんどの場合、仕事の都合などで帰宅時間は不規則になるケースの方が多かったのです。

では、他の家族の反応を通して、イヌは飼主の帰宅時間を推測しているのでしょうか。これもそのように考えられる場合もありましたが、弁護士、タクシー運転手、軍関係者、ジャーナリスト、助産婦など、当人しか予定がわからない職業でも同様の現象は確認されています。

例えば、病院にフレックスタイムで勤務している女性は帰宅時間がいつもまちまちであるにもかかわらず、勤務を終えて車に乗り込むと同時に飼い犬が家で反応するため、夫はいつでも淹れたてのお茶を準備して彼女の帰りを待つことができるそうです。むしろ、夫の方がイヌの様子を参考にしているのです。

従って、日課にすぎないと結論づけることはできませんでした。

飼い主が近づくのをかぎ分けるのでは？

イヌは人間より嗅覚が発達しているので、飼主やその車のおいを遠くからでも把握することができるかもしれません。

そこで、実際にイヌがどれだけ離れたにおいを感知することができるのか調べ

たところ、嗅覚に秀でた警察犬であれば、生垣に隠れている人のおいを風下八〇〇メートル程度なら嗅ぎとることができるといいます。ただし、これは風が一定に吹いていて、対象の人物が停止しているときの話。職場からの帰宅のように対象となる人物が十キロ以上離れている上、間に障害物が多くある状況では再現性がありません。

従って、飼い主が近づくのをかぎ分けているからと結論づけることはできませんでした。

飼い主が近づくのを聞きとるのは？

イヌの聴覚は人間以上に発達していると考えられています。ところが、イギリスの獣医学者シーリア・フォックスの実験によると、音レベルの検出感度は人間と大差がないそうです。サウサンプトン大学の実験によっても、より高い音を聴けるという点を覗けば、両者の聴覚能力に違いがないことが確かめられています。

仮に、人間には聞き取れない高音が目印になっている場合、飼い主の帰宅方法がバスや電車、飛行機といった公共交通機関の場合は成り立ちません。なぜなら、同じような乗り物が繰り返し運行しているため、音だけで飼い主が乗っているもの

がどれか特定することは不可能だからです。しかし、先の五百を超えるデータベースのうち、バスの帰宅に反応するものが六十件以上、電車の帰宅に反応するものが五十件以上含まれていました。このことから、イヌが飼主のいつ家路にいたかがわかるのは飼主の接近を聞き取っていると結論づけることはできませんでした。

また、興味深いことに、休暇や長期不在から帰る場合も、イヌは飼主がいつ家路についたかがわかるケースがありました。外国旅行から戻ったり、軍隊や商船から休暇で帰宅したり、家族でも細かい予定が教えられていない場合の事例も多くあったそうです。

別の大陸にいる飼主が帰途についたときでも、イヌが予期反応を示すということは、イヌと飼主の間にあるつながりは重力、電気、磁気の現象とは違って、距離には比例しないと考えられます。

イヌと人間の絆はテレパシーなのか、予知なのか？

このように距離に影響されないことから、シェルドレイクはイヌと人間の絆はテレパシーなのではないかと考えました。そして、テレパシーだとすれば、イヌ

は飼主の帰宅しようという考えや感情をなんらかの方法で感じ取っているという
ことになります。

一方、同様の現象はイヌに予知能力があるとも考えることでも説明がつきます。飼
主が帰ってくる未来が見えているとしたら、飼主の意志とは関係なく、イヌはそ
のときを待ち構えることができるからです。

イヌと人間の絆はテレパシーなのか？ 予知なのか？ シェルドレイクはイヌに
予知能力があることは完全に否定できないかもしれないが、テレパシーの方が
有望であると主張します。というのも、イヌが反応するタイミングは飼主の出発
時だったり、交通機関から降りたときだったり、家路の最終行程に当てはまるこ
とが多いからと言うのです。

さらに予知かテレパシーか見分ける上で、シェルドレイクは飼主の考えが途中
で変わった場合について調べました。もし、予知能力があるとすれば、帰宅する
つもりだった飼主が途中で帰宅をやめた場合、イヌはそのことも知っているの
で反応することはないはずです。ところが、実際にはちゃんと反応し、飼主がや
ってこないことにそわそわする事例が確認されたそうです。このことからもし

エルドレイクはテレパシー説を押ししています。

すべてのイヌにテレパシー能力はあるのか？

しかし、シェルドレイクはすぐに結論は出しません。彼が参考にしたデータベースは飼い主の帰りがわかるイヌに関する情報を求め、その呼びかけに応じてくれた人々の話に限られているので、予期行動の見られないイヌは母数に含まれていなかったからです。いわゆる回答者が偏った標本でした。

そこで統計的に有効な無作為標本のデータを集めるため、地理的および文化的に異なる複数の地域で、飼っているイヌが家族の帰宅前に興奮するか否か、電話による聞き取り調査を行いました。結果、全体平均五十一パーセントの家庭で予期反応が確認されました。

なぜ、約半数のイヌで予期反応が見られないのか。シェルドレイクは五つの可能性を提示しています。

- ① 一人暮らし家庭の場合、イヌの反応は観察不可能なので見過ごされている。
- ② 過去には予期反応を示していたが、飼主が褒めてくれなかったので、イヌが

予期反応をやめてしまった。

- ③ イヌが飼主に興味がなく、予期反応を示すだけの絆ができあがっていない。
- ④ 予期反応について感受性が低いイヌもいる。
- ⑤ 予期反応について相対的に鈍感な品種がある。

逆に予期反応が比較的確認されるイヌの特徴もシェルドレイクは挙げています。データベースのうち、個別の品種で最も多いのは順番にラブラドル・レトリバー、ジャーマン・シェパード、コリー、プードルだったそうです。もっとも、これらの品種が敏感なわけではなく、より好んで飼われているだけかもしれません。

その上で、シェルドレイクは運動犬やワーキング・ドッグなど飼主のコンパニオンとして役立つように育種されてきた品種のイヌほど、飼主の意図に対し、敏感になっているのではないかと仮説を立てています。

ビデオ実験

シェルドレイクはビデオ実験も行っています。家にカメラを設置し、飼主が家路につくとき、イヌがどのような反応をするのか定常的かつ自動的に観察しました。そして、この実験を詳しく知らない第三者によって予期反応の有無を評価し

てもらったそうです。結果、イヌは飼主がいつ家路についたかがわかっているらしいことが確認されたそうです。

また、同様の実験は日本でも行われています。2000年、日本テレビによるもので、帰宅時間が不規則な飼い主と留守番をしているペットの様子をそれぞれカメラで追跡。飼い主が仕事を終えて帰宅準備を始めると、そのことを知る由もないペットが玄関に移動し、飼い主を出迎える姿が映し出されました。

シェルドレイクの目的

なぜ、シェルドレイクはこのような研究をしているのでしょうか。彼は現代の生物学で支配的な考えとなっている生命機械論に抵抗しようとしています。DNAの発見によって、生物は遺伝的にプログラムされた複雑な機械とみなされるようになりました。それ故、魂が存在しないことになり、研究室ではラットやモルモット、マウスといった実験動物たちが殺されるためだけに飼育されています。動物を愛する気持ちから生物学の研究を始めたシェルドレイクにとって、それは耐えがたいことだったのです。

そこで、シェルドレイクは現代の常識に縛られることなく、あえて自由に仮説を

立てることで、現実に観測される不思議な出来事について、偶然以外の説明を試みようとしているのです。そのため、イヌのテレパシー説以外にも、シェルドレイクはネコ、オウム、ウマ、ニワトリ、ガチョウ、フクロウ、爬虫類、魚類、モルモット、フェレット、サル、ヒツジ、ヒトについても調べ、様々な仮説を提唱しています。

野村潤一郎（1961－ ） 世紀のスーパー獣医

ところで、シェルドレイクが注目した飼い主の帰りがわかる犬について、日本の獣医・野村潤一郎も似たようなケースを報告しています。

野村潤一郎は、子供のときから昆虫や動物の好きなフツウの少年でした。それで、大きくなったら獣医になろうと思っていました。獣医の下に弟子入りすれば簡単になれるかと思っていましたが、そのためには大学に入ること、その大学教育も6年間、そして国家試験を通らねばならないことを知り、みごとにクリアしました。資金がないので小型トラックで移動動物病院を始めようとしたのですが、法的にできないことがわかり、動物病院に務めました。

彼のスーパーぶりは、5日間までは徹夜ができること、食事は5分で済ませられること、そして何よりも動物が好きで、どんな動物でも受け入れることです。病院をだんだん大きくして、現在は東京・中野に、最新の設備を備えた地上7階、地下3階建てのビルを建てています。そしてその中で、100匹のあらゆる種類の動物を飼っています。院長は、他の医師がやらない難しい手術しかやりません。モダンな建物の1階には、ピカピカのスーパーカーが2台も置いてあり、訪問者の度肝を抜きます。

野村潤一郎は四歳のとき、円谷プロ製作の特撮ドラマ『ウルトラQ』に出てくる怪獣の生態に興味を持ち、動物の世界に興味を持ち始めます。身の回りに潜む怪獣を探すつもりで、幼稚園入園前から自然を探索していたそうです。

新宿生まれだった野村潤一郎の遊び場は西新宿八丁目に静やかに佇む成子天神社でした。ある夏の炎天下、その場所で青い空と濃緑の葉を背景にふわふわと移動する「空飛ぶ火の玉」を発見します。そのときは不思議なものがあると納得し、詳しくは追及しませんでした。後に、その正体は人魂だったかもしれないと気がつき、捕獲しなかったことを後悔します。そして、次こそはちゃんと研究するため、現在も3段ロッドで3メートルに伸びる高級竿を持ち歩いているのです。

テレパシーのような現象

そんな野村純一郎もまた愛犬家とイヌの間でテレパシーのような現象とかなりの頻度で遭遇していると明かしています。たとえば、ある心臓の悪いイヌが入院したときのこと。飼主は予定を立てずに旅をするような自由人で、病院を訪れる際に事前の連絡を入れていなかったにもかかわらず、そのイヌは地上 7 階の病室で、飼主が訪れることを察したようです。しかも、エレベータの数字を認識しているらしく、デジタル表示パネルをじっと眺めて待機を始めたというのです。まるで飼主がやってくることを知っているかのように。

また、自身も愛犬とテレパシーでつながっている感覚を持っていると公言しています。海外出張でニューギニアへ行った際、飛行機に乗って、日本の領空を離れるまではつながりを感じられるそうです。そして、帰国すると再び復活するようで、現地の交通事情はひどく混乱し、船が出なかったり、飛行機が飛ばなかったり、いつ帰宅できるか不明だったにもかかわらず、成田空港に到着した瞬間、自宅で愛犬が野村潤一郎の帰国を認識し、大喜びする姿が家族によって確認されています。

イヌと人間のコミュニケーション

テレパシーに限らず、野村潤一郎はイヌと人間のコミュニケーションには「生物界の奇跡」があると称賛しています。七歳の頃にイヌをペットに迎えてから、半世紀以上に渡って、歴代の愛犬たちをヒューマナイズ（人間化）してきたそうです。具体的には仔犬に絵本を読み聞かせたり、言葉を教えたり、社会のルールを教育したり、玩具を買い与えたり、一緒に遊んだり、ご飯を食べたり、お風呂に入ったり、同じ布団で眠ったりするのです。結果、イヌは表情筋とアイコンタクトによって、思考と感情のやりとりが可能になるといいます。

ただし、人間とイヌで表情が同じでも、そこに含まれるメッセージは異なる場合もあるようです。人間が笑うときは嬉しいときですが、イヌの場合は少し複雑。目上の者に対して、怖いけれど仲良くしたいというように、畏怖から畏敬へと変化していく感情を笑顔で表現します。

また、野村潤一郎はイヌがしゃべる様子を観察しています。しかも、それは呼びかけに対して、吠えて応じるといった機械的なオウム返しではなく、要求を伝えるために自発的に言葉を使い分けていたそうです。

参考資料

・ 家庭画報「スーパー獣医の動物エッセイ アニマル Q」2020年10月号
- 2023年9月号。

・ ほぼ日刊イトイ新聞「いきもの先生」

<https://www.1101.com/c/nomura/2008-05-08.html>

5. テレパシーの最前線

人間は自然破壊や動物虐待をするとき、法律違反でないから大丈夫と自己正当化を試みます。しかし、法律とは人間が自分たちで作ったルールに過ぎず、自然や動物たちからしたら知ったことではないはずです。

また、それは自然や動物たちとの関係に留まりません。わたしたち人間同士であっても、法律を違反していないからという理由で、倫理的におかしなことがまかり通ってしまう現実があります。人の心を弄んだり、友情を裏切ったり、自分の欲望を満たすために他人を利用したり、ルール上は罪にならない罪が多くあります。

いま一度、わたしたちも「動物として」を軸に自らの行動を顧みる必要があります。そして、そのことが動物としての人間という本質の発見につながり、忘れかけていた動物たちとのつながりを取り戻すきっかけになるはずです。そして、テレパシーは未だ科学的に証明されていなかったとしても、人間と動物が元来つながっていたことを示す貴重な痕跡なのかもしれません。

また、そのつながりは現世に限ったものではないかもしれません。エジソンが

「霊界通信機」を発明しようとしていたり、佐藤愛子が冥界からのメッセージを身近に経験したり、「幽霊」とのつながりも見逃すわけにはいきません。地獄から天国に至るまで、いくつもの段階があると言われていています。いま、同時代に生きている動物たちとの横軸のつながりに加えて、別の時代を生きた動物たちとの縦軸のつながりを意識することも欠かせません。

仏教では輪廻転生や殺生の禁止など、時空を超えて生命の尊重が重視されてきました。南方熊楠^{みなかたくまぐす}は「ネイチャー」に数多くの論文を掲載する一方で、テレパシーや土着的な民俗学に興味を示し、あの世とこの世の境界を気にせず大いに活躍しました。最近も NHK は「超常現象」について、真面目に検討する番組を放送し、アメリカはネバダ州の砂漠で開催される巨大イベント「バーニングマン」における「意識の力」調査の様子を伝えています。自然科学では解明できない事象を説明すべく、世界中の専門家が研究に努めています。

日本では明治大学の教授・石川幹人が「メタ超心理学研究室」を立ち上げ、幽霊や金縛り、お守り、テレパシー、透視、予知といった代表的な超常現象について深く洞察しています。

学術誌で認められたテレパシー

石川幹人は著書『超心理学——封印された超常現象の科学』の中で、超常現象を科学的に検証する超心理学という研究分野があることを紹介しています。そして、そんな超心理学が伝統的に注目してきたのはテレパシー実験であると伝えていています。

具体的には、音や光など外界からの情報をシャットダウンした部屋に被験者を入れ、アイマスクとイヤホンで感覚を制限した上でテレパシーの送受信が行われるかを調べる「ガンツフェルト実験」が1970年代には確立し、長年、データが積みあがっているそうです。ちなみにガンツフェルトとはドイツ語で「全体野」を意味します。

この実験の結果、偶然当たる確率と比較して、テレパシーと思われる力によって正答率が上がることが確かめられたと言われています。1992年、超心理者のチャールズ・ホノートンがその有意性を示す論文を心理学の学術誌『サイコロジカル・ブルティン』に投稿し、査読者全員の合意のもと、見事、掲載されました。

ところが、未だ、テレパシーが眉唾もの扱いされているのはなぜなのでしょう。

石川幹人によれば、それには米軍の超能力スパイ養成プロジェクトの失敗が影響しているそうです。

米軍が超能力を本気で研究したスターゲイト・プロジェクト

1970年代、米ソ冷戦の緊張が高まる中、「鉄のカーテンの向こう側の超能力研究」というレポートがベストセラーとなりました。そして、ソ連に対抗するため、米軍もスタンフォード研究所を中心に、スターゲイト・プロジェクトと呼ばれる超能力研究を開始します。

そこでは主に遠隔視の研究が進められていたと言われています。超能力の軍事利用が目的だったので、敵地の様子を遠い距離から確認することに必要があったのです。

その際、米軍兵士の中でも、砲弾の飛来する場所を予想するのが得意と定評のあったジョゼフ・マクモニーグルが被験者としてスカウトされました。彼は「被験者第001号」として、後に数多くのテレビ番組で活躍。日本でも日本テレビ系列の特別番組「FBI 超能力捜査官」や森永製菓ダースのCMに出演するなど人気者となりました。

しかし、当のスターゲイト・プロジェクトは特に目立った成果が上がることはなく、一九八七年に国立研究審議会（NRC）が「超心理学現象は 30 年間も研究されたが、科学的な正当性は何も得られなかった」という調査報告を発表し、1995 年には、CIA の管轄へと移ることになります。その際、CIA も再評価を行いました。一連の実験で統計的に有意な結果が確認されたけれど、諜報活動には役立たないと結論付けられてしまいます。そして、プロジェクトは終わりを迎えたのです。

このことは超能力に対する大きなイメージダウンとなります。米軍が主導し、約 25 年に渡って多額の資金を投入したにもかかわらず、特に成果を得られなかったということで、超能力は存在しないという印象が世間に広がってしまいます。

この批判的な声はテレパシーにも及ぶことになり、先述の通り、学術誌でその有意性が示されてもなお、インチキであるというレッテルが張られるに至ってしまったのです。

超能力の軍事利用は続いている？

しかし、一方で、超能力の軍事利用は続いているという話もあります。例えば、2019年にニュースウィークはネット上に『ロシア軍は超能力を使っている?』という記事を掲載し、ロシア国防省の公式機関誌は軍が超能力者と手を組んでいると発表していることを報じました。具体的には、超常現象で戦場の兵士を支援したり、イルカを使ってテレパシー実験を行っていたりしているという内容でした。

また、2009年に月刊誌 WIRED はネット上に『米軍、「テレパシー」研究を本格化』という記事を掲載し、米国防総省の国防高等研究計画局 (DARPA) が Silent Talk と呼ばれるプログラムのため、四百万ドルの予算を計上していると報じました。なお、国防高等研究計画局 (DARPA) はインターネットの前身となるシステムや GPS を発明したことで知られています。どうやら、テレパシーを技術として活用しようという動きはスターゲイト・プロジェクトが終わってもなお、継続していたようなのです。

残念ながら、各国の軍部は公式に認めてはいませんが、このようにテレパシーという言葉はいまも多くの人を魅了しています。

イーロン・マスクが発表した新商品「テレパシー」

テスラやスペースXなど革新的な企業の創設者として知られるアメリカの実業家イーロン・マスクもまた、テレパシーという言葉に魅了された人物の一人です。彼は脳に IC チップを埋め込み、考えるだけでスマホやパソコン、家電を操作する技術を開発するため、Neuralink という会社を設立しました。そして、2024 年 1 月 30 日にイーロン・マスクは人間による臨床実験に成功したことを発表しました。

さらにイーロン・マスクは Neuralink の最初の製品名が Telepathy(テレパシー)であることを明かしました。その詳細について、公式 X で「考えるだけで、携帯電話やコンピューター、そして、それらを通じてほとんどすべての機器をコントロールすることが可能になります。最初のユーザーは手足の不自由な人たちでしょう。スティーブン・ホーキング博士がタイピストや競売人よりも素早くコミュニケーションができることを想像してみてください。それが我々の目標です」と説明しています。

このようにいまや「テレパシー」という言葉は超能力の範囲を超え、誰もが使える技術になろうとしているのです。

NEWSWEEK : Russia's Paranormal Soldiers and Military Dolphin Telepathy

Revealed by Defense Ministry Magazine

<https://www.newsweek.com/russias-military-uses-psychics-telepathy-and-paranormal-techniques-says-1386030>

WIRED : Pentagon Preps Soldier Telepathy Push

<https://www.wired.com/2009/05/pentagon-preps-soldier-telepathy-push/>

イーロン・マスク公式 X

<https://x.com/elonmusk/status/1752119586470949056?s=20>

6. むすび

霊界との通信から始まったテレパシーは発明家のエジソンや心霊現象研究学会を立ち上げたフレデリック・マイヤースなどの研究を経て、知の巨人として知られる^{みなかたくまぐす}南方熊楠によって日本へ紹介されました。

本書では作家の佐藤愛子、生物学者のルパード・シェルドレイク、獣医師の野村潤一郎が経験した不思議な現象を通し、科学的に証明されていなくても、テレパシーとしか言いようのない現象が実際にあることをお伝えしました。

さらに、明治大学の教授で「メタ超心理学研究室」を立ち上げた石川幹人によって、学術的にテレパシーの有意性が示されたにもかかわらず、米軍のスターゲイト・プロジェクトの失敗で役に立たない技術扱いされてしまった歴史を確認しました。

そして、テレパシーの最前線として、IT 業界の寵児であるイーロン・マスクが「テレパシー」という名の新しいテクノロジーを発明し、一般に普及するのも時間の問題となりつつあります。

このように「テレパシー」の受け取られた方は時代とともに大きく変化しています。むかしはメカニズムがわからなかったので、超常現象のひとつとして扱わなければならなかったテレパシー。でも、科学は進歩します。進歩すれば超常現象から脱する現象も出てきます。いまや、テレパシー障害を持った人たちを救う技術になろうとしています。つまり、いまや、テレパシーは超常現象ではありません。

文献リスト

- ・ルパート・シェルドレイク著 田中晴夫訳『あなたの帰りがわかる犬』
工作舎 2003年1月20日。
- ・ルパート・シェルドレイク著 田中晴夫訳『あなたの帰りがわかる犬 人間と
ペットを結ぶ不思議な力』 工作舎 2003年。
- ・野村潤一郎「アニマル Q」『家庭画報』 2020年10月—2023年9月。
- ・志村真幸『熊楠と幽霊』 集英社インターナショナル 2021年2月10日。
- ・佐藤愛子『私の遺言』 新潮社 2002年10月31日。
- ・佐藤愛子『冥界からの電話』 新潮社 2021年8月1日。
- ・水木しげる『猫楠 - 南方熊楠の生涯 - 』 KADOKAWA 1996年10月25日。
- ・志村真幸『熊楠と幽霊』 集英社インターナショナル 2021年2月10日。
- ・水木しげる『猫楠 南方熊楠の生涯』 角川文庫 1996年10月25日。
- ・唐澤太輔『南方熊楠 日本人の可能性の極限』中央公論新 2015年4月25日。
- ・石川幹人『「超常現象」を本気で科学する』新潮社 2014年5月16日。
- ・石川幹人『超心理学——封印された超常現象の科学』紀伊國屋書店 2012年
8月29日。
- ・梅原勇樹, 苅田章『NHK スペシャル 超常現象 科学者たちの挑戦』NHK 出版
2014年3月20日。